

# 中谷宇吉郎 雪の科学館 通信特別号

NAKAYA UKICHIRO  
MUSEUM OF  
SNOW AND ICE

企画展図録  
「雪博士がもらった手紙」

2002 (平成14). 6. 27

発行 / 中谷宇吉郎 雪の科学館  
〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ106番地  
TEL 0761-75-3323 FAX 0761-75-8088

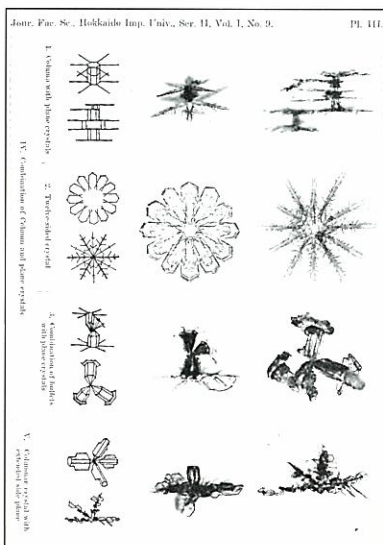
## 企画展 / 雪博士がもらった手紙 (\*) ○とき 6月27日(木) ~ 7月30日(火) ○ところ 中谷宇吉郎雪の科学館

雪博士・中谷宇吉郎の、科学者、随筆家としての多彩な活動を通して、いくつかの思いがけない出会いが生まれました。

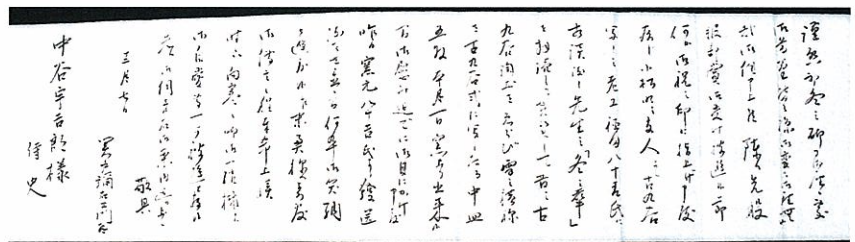
宇吉郎は「雪は天から送られた手紙である」という言葉で知られていますが、彼がのこした実際の手紙からは、政治家、宇吉郎の門下生、学生など様々な立場の人々との交流の軌跡を発見することができます。今回の展示では、「手紙」を手がかりに、彼の言葉や姿勢、仕事などに触発されて生まれた、さまざまな出会いについて考えていきます。

また、後半では、宇吉郎没後の現代における出会いの例を、3点紹介します。

### □ 門下生の父からの手紙：関戸彌右衛門氏から宇吉郎へ



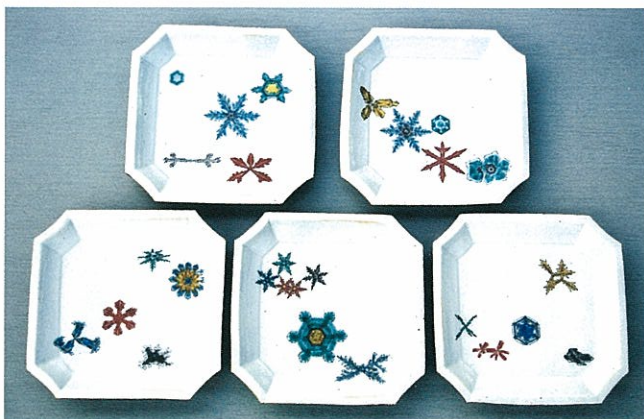
北海道帝国大学理学部紀要(1936年)より



中谷宇吉郎様  
侍史  
関戸彌右衛門  
十二月七日

謹啓初冬の砌に御座候処  
御高堂皆々様御変も御座無候  
哉御伺申上候 陣り先般  
服部賞御受け被遊候節  
何か御祝の印に指上げ申度  
存じ小松町の友人にて古九谷  
写しの老工徳田八十吉氏に  
相談致し先生の「冬の華」  
を拝読して貰ひまして昔の古  
九谷陶土をえらび雪の模様  
を古九谷式に写したる中皿  
五枚本月一日窯上り出来候  
間御慰み迄にて御目に向け申度  
昨日窯元八十吉氏より発送  
致させ置候間何卒御笑納  
遊され度候年末與様へよろ敷  
御伝えの程奉希上候  
時分向寒の砌御一統様には  
御自愛專一可被遊と存候  
先に御伺旁右御案内申上候  
敬具

関戸彌太郎氏から宇吉郎への手紙 (昭和13年12月7日)



徳田八十吉氏作 九谷焼中皿5枚

昭和13(1938)年10月、宇吉郎の「雪の結晶の研究」に対して服部報公会賞が授与された。これを祝して、宇吉郎の門下生で、人工雪研究に貢献した関戸彌太郎氏の父・関戸彌右衛門氏は、九谷焼の名工・徳田八十吉氏(初代)に特注し、雪の結晶を描いた5枚組の中皿を贈った。

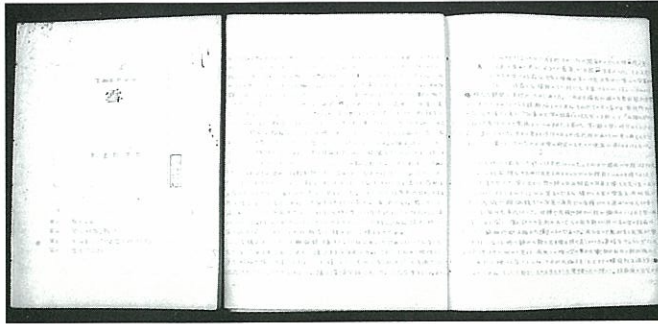
これは、1934~36年の北海道帝国大学理学部紀要に掲載された、宇吉郎と関戸彌太郎氏との共著を含む論文に載った、雪の結晶写真を手本にしたものだった。

これらの皿には、雪の結晶の多様な姿が、九谷焼特有の五彩色で鮮やかに描かれている。宇吉郎は、幼い頃に九谷焼職人への道を考えたこともあり、「九谷焼」(『冬の華』所収)という随筆を書いている。

(\*) 本企画展は《科学の心と芸術》制作グループが「中谷宇吉郎：一人の科学者」展(2000年12月~2001年1月 東京・代官山)のために企画した内容をもとに、雪の科学館の展示のために新たに構成したものです。  
構成：田坂博子(株)プロセサート

# □ 学生からの手紙：久泉迪雄氏から宇吉郎へ

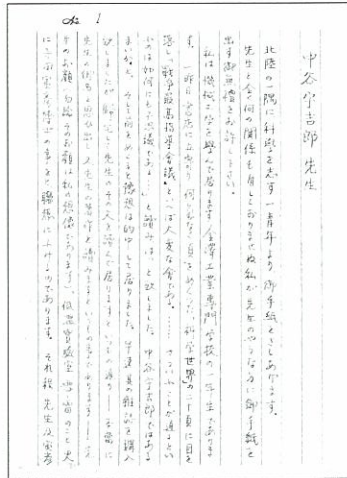
戦時中、寺田寅彦、中谷宇吉郎を愛読する一科学少年であった久泉迪雄氏は、宇吉郎の著作『雪』に感動し、自然科学を志した。物資が不足し、出版活動が停止状態になるなか、久泉氏は昭和19年の暮頃に、友人から借りて読んだ『雪』の全文をペン字で書き写した。そして、久泉氏は宇吉郎に長文の手紙を書き、宇吉郎は当時出版されたばかりの『科学の芽生え』(生活社 昭和20年)を贈っている。



久泉氏が『雪』を写したノート

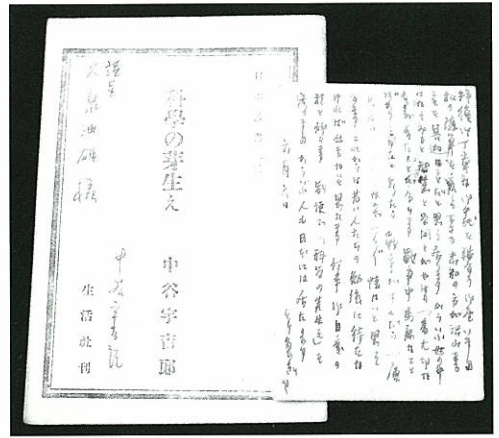


久泉氏が書き写した『雪』(昭和18年第8刷)



久泉氏から宇吉郎への手紙の冒頭部分(昭和21年3月13日)

拝復御丁寧な御手紙を難有う御座いました私の随筆を愛して下さる未知の方が沢山あることになってみると智恵と学問とがやはり一番大切なものであったことが分ります 戦争中馬鹿なことばかりしていたと思ったら競争がすんだら一層馬鹿なことばかりなのでつくづく情ないと思つてみます これからは若い人たちの勉強に待たなければ仕方ないと思ひます 何卒御自愛の程を祈ります別便で「科学の芽生え」を送りました かういふ人も日本には居たのです  
六月六日  
とり急ぎ 匆々



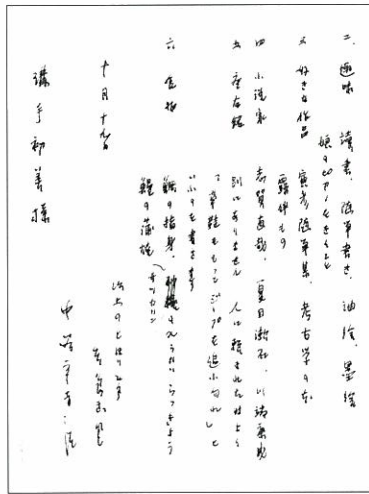
宇吉郎から久泉氏への葉書(昭和21年6月6日)と『科学の芽生え』

# □ 中学生からの手紙：宇吉郎から溝手初美さんへ

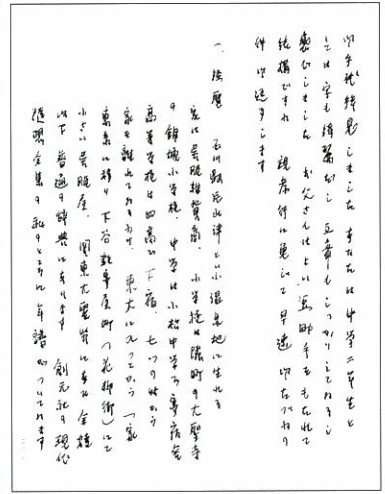
当時中学2年生だった溝手さん(現 前田初美氏)は、学校の宿題で宇吉郎について調べることになり、文学青年だった父親の助言もあり、宇吉郎へ直接質問する手紙を書いた。右の手紙は、宇吉郎が溝手さんの手紙に対して応えたものである。



高校1年頃の溝手さん



宇吉郎から溝手さんへの手紙(昭和29年10月19日)



## 手紙書き

中谷宇吉郎

よく返事を要する手紙を机の上に置いて苦しんで居る人があつて読み返してみても、まあ明日ということにして又納い込んでしまふのである。返事を書こうと思つたら既に為すべき返事の半分は出来て居るのであつて、明日になつたら又返事を書こうと思つたに、今日費やしたと同じだけの精神力を改めて浪費しなければならぬということに気が付かぬらしい。之は丁度二十年満期の保険を十年かけて放棄して、又改めて二十年満期の保険をかけるようなものである。こんなことを毎日やつて居ては、どれだけ脳力があつてもたまつたものではない。少し纏つた本を読もうとしたり、実験の模様変えをしたりする場合にも、全く同じことがある。それを最も切実に感じて居るのは、実は自分自身なのである。

『冬の華』(岩波書店昭和13年)二日一文より

政治家からの手紙：鶴見祐輔氏から宇吉郎へ

昭和22年2月、「立春に卵が立つ」というニュースが世界中をにぎわした。これに対して、宇吉郎は自ら実験を行ない、「立春でなくとも卵は立つ」ことを証明し、人類の盲点を指摘する随筆「立春の卵」を雑誌『世界』の同年4月号に発表した。当時、国際的な政治家、学者であった鶴見祐輔氏は、「立春の卵」の一読者として、宇吉郎に対し率直な賛辞を送っている。



『立春の卵』  
(書林新甲鳥 昭和25年)



鶴見祐輔氏（『英雄待望論』  
(昭和3年講談社)口絵より)

Profile

鶴見祐輔：1885年群馬県生まれ。1910年東京帝国大学法科政治学科卒業後、内閣拓殖局をへて鉄道院に入り、1924年鉄道省を退職。1928年より衆議院議員に当選4回。1953年参議院議員に当選。1954年鳩山内閣厚生大臣。メルボルン大学名誉法学博士。テリ大学名誉文学博士。1973年没。『南洋遊記』『北米遊説記』『欧米大陸遊記』『ナポレオン』『ブルターク英雄伝』『ハイロン』『後藤新平』『母』ほか著書多数。

只今世界四月号の玉稿立春の卵を拝読し御能語の人類の盲点といふ御文字に深き興味を感じ申候まゝ、感激の薄れぬうちに一筆差上仕候 近頃このやうな面白い文章を拝見したること無之あつく御礼申上候 小生も政治などに関係致し居候ため 人類の盲点といふことに異常に興味を有し居候次第に有之 其の例として卵の御話を御引用のことに深甚の興趣を覚候次第に有之候まことに突然の書状不思議と御考へ被遊るべきかと存じ候得共一読者としてのアプリシエーション申上度御書中奉得貴意候 敬具 二十二年六月六日 於熱海 鶴見祐輔

只今世界四月号の玉稿立春の卵を拝読し御能語の人類の盲点といふ御文字に深き興味を感じ申候まゝ、感激の薄れぬうちに一筆差上仕候 近頃このやうな面白い文章を拝見したること無之あつく御礼申上候 小生も政治などに関係致し居候ため 人類の盲点といふことに異常に興味を有し居候次第に有之 其の例として卵の御話を御引用のことに深甚の興趣を覚候次第に有之候まことに突然の書状不思議と御考へ被遊るべきかと存じ候得共一読者としてのアプリシエーション申上度御書中奉得貴意候 敬具 二十二年六月六日 於熱海 鶴見祐輔

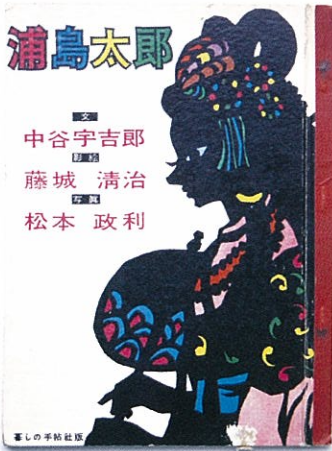
鶴見祐輔氏から宇吉郎への手紙(昭和22年6月6日)

4ページ（現代の詩人からの手紙）より続く

夕べ 違った 25万年前に

水たちにも歴史があった 桃の節句の日に  
氷たちは 抱きかかえられ  
グリーンランドから  
高輪の ぼんぼりの部屋に現れた  
胸もとから そつと かかえていた包みを  
彼女は 女主人にわたすと  
あれは遠い日だった とてもとても  
雪がふる ふる の したに 空気が  
ふった雪は 氷になり 空気を したに  
閉じこめてしまひ すっかり 氷になりすまし  
すると また 雪が  
あれから 何万年たったかなと  
雪はいつた いまでは氷になってしまったが  
父は振りつづけ 振りつづけ  
何万年も 何十万年も過去の方へ 歩いて  
いって そして 帰らなくなったのヨ  
あそこは 25万年まえまで さかのほって  
いや さかおりにいけるの  
そこから この予は あつというまに  
25万年未来の ここにきたのよ  
氷は返事をしない グラスの水の中で  
しずかに なにかがはじまる  
ようやく ゆっくりと からだを動かして  
記憶はもうない？ それともある？  
ゆっくりと 水の中に 身をゆだね  
水へと移行するとき 内側から 赤ん坊の  
ように あるかないかの 声を  
あけるものがある 空気たちが  
プツツと 25万年前の 25万ふりの地上への脱出  
水から水へとてゆくときに  
これらの うが声にも 語りにも  
合図にも 似た こえ？ おと！ を きく  
ネ 25万年まえの 空気をふくんだ氷なのよ  
きこえる でしょ きこえる でしょ  
わたしたちは 8ぼんの耳で きいた  
25万年まえの  
グリーンランドが どんだったか  
まったく知ることもなく そこにいたるまでの  
20万年まえも 19万年まえも  
まったく 知らないのに  
氷と雪、いや 雪から氷にむかうあいだで  
閉じこめられた 無言の空気のこと  
高輪の ぼんぼりの部屋に現れた 氷たちは  
美しい女主人と その客人たちの ダンボ  
より大きい耳たちを あとにして  
水になりながら つぎつぎと  
ちいさな 眼にはいらぬほど ちいさな  
空気たち を のがしてやった  
ひさしりの 闇にあふれる 空気の  
どこに まさって いる のか  
もう わからない もう この部屋のごとに  
25万年前の 空気くんたちが いるのか  
プツツ、と一瞬の 氷からでるときの  
おと だけが  
きこえるか きこえないかの おと だけが  
夕べ 違った 25万年前に  
(高輪の ぼんぼりの部屋で 99年3月3日)  
白かかすこ「ロハの貴重な源より」  
(編) 潮社 二〇〇〇年 (年)

□ 現代の哲学者からの手紙：鶴見俊輔<sup>しゅんすけ</sup>氏から宇吉郎へ



『浦島太郎』(暮しの手帖社 昭和26年)

鶴見俊輔氏は、宇吉郎に関する文章のなかで、しばしば絵本『浦島太郎』に触れている。『浦島太郎』は、戦時中に宇吉郎が子どもたちに語り聞かせていた物語であり、その語りの文体と藤城清治氏の動きのある美しい影絵が特徴となっている。



Profile

鶴見俊輔：1922年東京生まれ。1942年ハーバード大学卒業。1946年『思想の科学』の創刊に参加。京大、東京工大、同志社大、エル コレジオ大（メキシコ）、マツギル大（カナダ）で研究と教育に従事。1970年以降は著述業。高野長英賞、推理作家協会賞、大佛次郎賞、朝日賞を受賞。

鶴見俊輔氏による講演

中谷宇吉郎雪の科学館講演会（私の宇吉郎シリーズ5）  
 題『宇吉郎の発想と文体』  
 ○7月6日（土）13:30～  
 ○片山津地区会館テリーナホール（入場無料）

□ 現代の美術家からの手紙：カールステン・ニコライ氏から宇吉郎へ

科学と芸術の関係に注目するドイツ人のアーティスト、カールステン・ニコライ氏は、偶然、宇吉郎の著作、『Snow Crystals: Natural and Artificial』(Harvard University 1954)を読んだことがきっかけで、宇吉郎に捧げる<スノウ・ノイズ>という作品を発表した。音の構造を雪の結晶で表すこの作品では、観客が、会場で実際に人工雪をつくり、結晶をながめることができる。



〈スノウ・ノイズ〉の展示  
 ワタリウム美術館・展覧会カタログより

<スノウ・ノイズ>では、壁に数組の手袋がぶらさがっていて、観客は手袋をはめて、人工雪をつくる作業をする。手袋は、人指し指と親指の部分に穴が空き、指を出せるようになっている。宇吉郎の随筆『雪雑記』（『冬の華』）などに、手袋の記述があるが、ニコライ氏はそれを読んではいない。ニコライ氏の手袋は、まさに雪をつくる手作業に対する彼自身の想像力から生み出され、その結果、宇吉郎のしごとをなぞるような不思議な偶然がうまれた。



カールステン・ニコライ氏作 手袋（個人蔵）



Profile

カールステン・ニコライ：1965年 旧東独カール・マルクスシュタット（現ケムニッツ）生まれ。かつて庭師として働き、のちにランドスケープ・デザインを学ぶ。現在ベルリン、ケムニッツを基点に、現代美術、サウンド・アート、メディア・アートなど多領域での活躍を見せる。自身の音楽レーベル「raster-noton」名義でのCDの発売やサウンド・パフォーマンスとしても知られている。現在、ワタリウム美術館（東京）で日本初の個展カールステン・ニコライ展「平行線は無限のかなたで交わる」（2002年9月6日まで）を開催中。

□ 現代の詩人からの手紙：白石かずこ氏から宇吉郎へ

白石かずこ氏は、宇吉郎のグリーンランドの氷の話に触発され、詩「夕べ 逢った25万年前に」を発表している。この詩は、東京・代官山で開催された「中谷宇吉郎：一人の科学者」展のパフォーマンスで、舞踏と音楽（舞踏：大野慶人氏 サックス：梅津和時氏との共演）とともに、巻手紙の形で読まれた。今回の展示では、白石氏のご好意により、新たな手紙が制作され、科学館に寄贈された。

（詩は3ページに掲載）



Profile

白石かずこ：1931年カナダ生まれ。ジャズやビートの詩人の影響を強く受け、特に自作の朗読で国際的に活躍。詩集に『聖なる淫者の季節』『一艘のカヌー、未来へ戻る』『砂族』ほか。最新刊に『ロバの貴重な涙より』がある。（撮影 海田悠氏）



グリーンランドの氷でオンザロック。とけると、かすかな音がし、中に閉じこめられた昔の空気が出てくる



グリーンランドの氷を掘る宇吉郎